



大江健三郎ノート 第2回 一九七〇年の終末論

梶尾, 文武

(Citation)

文学+, 2:167-181

(Issue Date)

2020-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100497629>



一九七〇年の終末論

梶尾文武

1 ベ平連との曖昧な関係

一九六五年春のアメリカ大使館前デモに始まる「ベトナムに平和を！市民連合」(ベ平連)が、同時代の反戦市民運動を牽引した運動体であったことは、つとに語られるところである。小田実らベ平連知識人の政治的立場は、「戦後民主主義者」を自称する大江健三郎のそれと一見したところ近いが、両者の関係は不明なところが多い。

ベ平連の運動の牽引役として知られる作家小中陽太郎は、大江が彼らの運動を「かげにひなたに応援してくれた」と言い、六九年から七〇年にかけて運動の広報誌『週刊アンボ』を刊行した際には、小田実や鶴見俊輔とともに、大江が「百万という単位の金を、それもまとめて提供した」との事実を明かしている(1)。他

方、ジャーナリスト本多勝一は、当時の『週刊新潮』が「ベ平連の主役たち」を「猛攻撃やスキャンダル暴露の対象」としたこと、に反撥しつつ、大江がベトナム反戦運動に「協力的」な態度を示しながら、「自分の運動仲間たちを猛攻撃する雑誌の出版社から次々と本を出したり雑誌に書いたりして協力し、なにか呵責を感じないのだろうか」という疑問を呈している(2)。大江のベ平連へのコミットメントは、曖昧な、どっちつかずのものに見える。

小中陽太郎は運動の当事者の立場から、ベ平連の成立を三つの流れの合作として捉えている。すなわち、『思想の科学』や『声なき声』を中心とする日常生活重視の地域運動タイプ、「小田氏を中心とする国際的関心とジャーナリスティックな傾向をもつ集団」、「武藤一羊氏や吉川勇一氏らのように、世界観の問題、というか、歴史を貫いて流れる普遍的なるものへの憧憬と、歴史の中

にあることのさやかさを人生の礎に置く人々」が、その三つである(3)。ここで名が挙がる武藤一羊と吉川勇一は、一九五四年のいわゆる「三・一四事件」に連座した学生運動家であった。この贗学生監禁事件と、裁判における東大生活動家の偽証が、同年四月に大学に入學した大江の初期作品の発想を強く規定したことは、すでに見た。武藤と吉川は事件後、日本共産党構造改革派に属する専従運動家として活動したのち離党、ベ平連の中心的理論家としてイニシアティブを握ってゆく。桂秀実は、大島渚の映画「日本の夜と霧」(六〇年公開)が武藤・吉川によるスパイ監禁事件を描いていたと指摘し、「このことは、具体的に指摘されずとも、当時から六〇年代の新左翼活動家には触知される雰囲気であり、ベ平連をどこかいかかわしいものに感じさせていた」と述べるが(4)、大江もまたそのいかかわしさをよく知っていたはずである。大江をしてベ平連への参加を逡巡させた遠因は、一九五四年のあの禍々しい記憶に求められよう。

追記しておけば、ベ平連においては武藤や吉川と手を組んだ小中陽太郎も、大江とは東大仏文科の同期であり、三・一四事件を知悉していた。自身のベ平連での活動について、虚実を織り交ぜながらぼろりアルタイムでレポートした小中の『小説ふあつく』(現代の眼 71・6-72・3→現代評論社、72・4)には、次のような一節が読まれる。登場人物のひとりであるベ平連活動家の台詞である。

そう言うって彼は、彼の青春をふりかえる眼になった。

「ぼくが駒場のとき、偽学生スパイ事件というのがあった。このとき、高口良助助教授が『キャンパスの青春』という本を書いたんだ。これが、ものすごい評判となってベストセラーになった。ところが関係者の我々からみるとウソッパチなんだ。ぼくは怒った。怒って、彼のところに行き、そのベストセラーの印税のいくらかでもいいから、裁判費用にカンバせよ、と言った。そしたら、彼はいま、家を建てて金はない、と言うのだ。ぼくは心から彼を軽蔑した。そのときのことを思い出したんだ」(5)

右で口にされた「高口良助」という名は、東大駒場でドイツ語を教えた山下肇の変名であらう。ベストセラーとなった山下の著書『大学の青春・駒場』の記述には、多くの虚偽が含まれていた。山下のそれらの虚言は、監禁事件の加害者たる東大生を庇うことを意図していたと見られるが、右の台詞からは、彼の「ウソッパチ」がむしろ当事者である東大生の怒りを買っていたことが窺われる。この台詞を発した「政治党派の党略に通曉している滝田九佑」なる人物は、ほかでもなく武藤一羊をモデルにしている。吉川勇一をモデルとする「清岡信成」という人物も登場し、作中、両者の関係は次のように観察される。「大学以来のつき合いのこの二人は、たがいにバラフレイザーの役目を無意識に勤めながら議論

を運んで行くのだ。その場合、清岡が訊ね、滝田が絵解きする、というのが決まりだが、実は清岡の方が結論を誘導していることだ
ってあり得るのだ。これは弁証法的八百長というのではなからう
か」(6)。

閑話休題。山本昭宏は、武藤一羊・鶴見良行・鶴見俊輔といっ
たベ平連知識人の言説と大江のそれとを比較し、両者の差異を戦
後民主主義に対する批判という契機の有無に求めている。すなわ
ち、ベ平連知識人の言説に戦後民主主義＝安保体制下における「平
和」の欺瞞性に対しての批判が含意されているのに対し、大江は
あくまでもその擁護に就いたところに両者の間の溝が認められる
というのが、山本の見通しである(7)。なるほど、それはそうか
もしれない。だが実際のところ、戦後民主主義を批判するか擁護
するかは、ベ平連の運動にとっては小異にすぎない。そのことは
たとえば、『危険な思想家』(光文社、65・3)で知られる、戦後民
主主義擁護の代表的論客たる山田宗睦が、関西ベ平連の牽引役を
担ったといった事実からして明らかである。ベ平連の基本的な主
張はあくまでも「ベトナム反戦」、あるいは七〇年前後においては
「安保粉砕」であった。その運動が大同団結的に「市民」を糾合し
えたのも、岡本太郎が大書したところの「殺すな」というシンダ
ルイッシューに基づく、脱イデオロギー的なものだったからであ
ろう。

大江健三郎の中篇小説『月の男』^{トイ・メン}は、作家とベ平連知識人との

関係に加えて、大阪万博、日本未来学、楯の会事件といった一九
七〇年の知的・政治的現象を大胆に歪形しつつ虚構化した作品で
ある(大江作品を網羅的に扱う前掲山本書は、七〇年前後の大江とベ平連と
の関係についても触れているが、この問題に関する最重要作といふべき本作を
視野に入れていない)。この作品は、短編「死滅する鯨の代理人」(「新
潮」71・11)を、作者の言葉によれば「有機的に吸収して、ここに
内包し」たものであり(8)、単行本「みずから我が涙をぬぐいた
まう日」(講談社、72・10)に収められた二つの中篇小説のうち、表
題作に続く後篇をなす。川西政明は『月の男』^{トイ・メン}を評して「想像力
のガラクタ」と呼ぶが(9)、あたかもガラクタのつぎはぎのよう
に錯雑としたこの作品には、大江の知るベ平連周辺の知識人が、作
家の想像力を通して歪形されつつ召喚されている。

いつか、酒を飲んでいるとき、後藤明生氏(作家)がしみじみ、
私にいった。

「君を見ていると、ほんとに『走り続けよ』という気が
するなあ」

これは大江健三郎氏の同名の小説をもじっていったのだが、実
際、時に大江氏の小説には、私らしき男の戯画が登場しなくも
ない。いや、『ムーン・マン』の中で鯨に平和を市民連合に血道
をあげ、最後に血まみれになって死ぬ青年は、誰やらに酷似し
ている、と大江氏自身が私にいった。(10)

先にも引いた小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争』の一節である。みづから言うとおり、大江の「月の男」^{マイ・マン}には、小中をモデルとする人物が細木大吉郎という名で登場する。

小中は大江と同じく一九五四年に東京大学に入学し、当時出講していた福永武彦の教えを受けて仏文科でロートレアモンを研究した。卒業後はNHKに入社し、「夢であいましょう」等の制作に携わった小中は、日仏合作ドラマ「真夜中の太陽」(六四年放送)の制作に際して出演女優のキャテリーヌ・ソラと恋仲となり、彼女を追って渡仏する。小中はその顛末を小説「真夜中の太陽」を求めて」(『婦人公論』64・8↓『愛と別れ』河出書房新社、64・11)に著し、筆禍のため失職した。その後は『平凡バンチ』誌上で連続対談を行ない、日本テレビ系列の「11PM」に度々出演するなど、同時代では野坂昭如や三島由紀夫と並んでメディアに多く露出したタレント作家である。NHK時代に小田実原作によるドキュメンタリー風のドラマ「しゅうちゅうとゴム」(六二年放送)を制作したことが機縁となつて、小中はNHK退社の翌年から平連の活動をお小田とともにした。

小中は右に引用した一節に続き、大江の「月の男」^{マイ・マン}について、「この小説の最初のモチーフは、私が書いた『ふあつく』に、氏らしき人物が登場することに感情を動かして、構想の第一歩が生まれたにちがいない」と述べるが、この時期の大江と小中が小説創

作において相互に影響し合っていることは確かである。そもそも小中が『小説ふあつく』を著したのは、「大江健三郎があるとき、『君ねえ、平凡バンチのスタイルで小説を書いたらどうなの』と言ったことによる」という(11)。「小説ふあつく」作中には、次のような叙述も読まれる(モデルと思しき人物の名を「」に付記する)。主人公である木庭唐一郎はここで、神田一ツ橋で開かれた反戦集会の司会を務めている。

司会の木庭(小中陽太郎)は、その時、昨年この会で、二人の小説家が三島由紀夫の死にふれて言った言葉を思い出していた。「日本人は、三度、その人の名で万歳を唱えれば、誰でも右翼になれるのです。なつてしまします」

その小説家(大江健三郎)は今年の会では、一人の代議士小説家(石原慎太郎)を批判して訣別の詩を読んだが、舞台を降りて来て、木庭の顔を見るとこう言った。「今度、君そっくりの男が出てくる小説書きました。その君そっくりの男は、最後に鯨に喰われて死んじゃうのです、アハハ」と口をすぼめて、唇はたしかに「オ」の形をとっているのに、音声はあきらかに「アハハ」と笑った。

右の場面を配する『小説ふあつく』第七章は、『現代の眼』七一年一二月号に掲載された。小中と「そっくりの男」を登場させる

短篇「死滅する鯨の代理人」が掲載されたのは、『新潮』同年一月号である。大江が「死滅する鯨の代理人」の執筆直後にモデルの問題を小中に示唆すると、小中は直ちに右のように『小説ふつく』でそのことに言及しているのである。のちに、「月の男」へと改作された「死滅する鯨の代理人」においては、細木大吉郎＝小中陽太郎が主人公の座に配されている。まずは「死滅する鯨の代理人」を独立した作品として読み解いていこう。

2 鯨学者と軽薄な作家——「死滅する鯨の代理人」

作品はあるアメリカ人と「僕」との対話から始まる。スコット・マッキントッシュという名のこの人物は、「鯨学者」にして、現存するすべての鯨の擁護者」であり、「鯨の濫獲をふせぐ運動のために、世界の捕鯨国を行脚している」。こうして一作は、グリーンピースの活動に先駆けて、反捕鯨というエコロジー運動を主題化する。「僕」は、「自分のかわりに、彼の鯨保護キャンペーンに協力してくれるはずのひとりの男」すなわち細木大吉郎をスコットに紹介する。

作品が物語る細木の経歴は、小中陽太郎の経歴をあからさまになぞりながらそれを歪形している。「僕」の紹介するところによれば、「細木大吉郎君は、僕の大学の同級生ですが、「新左翼」の活動家でもあるし、テレヴィの深夜番組の常連でもあるし、若者向けの週刊誌で、愉快な対談もつづけています。大学ではロートレ

アモンの研究家でしたよ。細木はもともと「日比谷高校、東大、外務省、というタイプ生き方」を歩んできたが、「ポルトガルだったか、スペインだったかの、駐日大使の娘の可愛い金髪娘と情事をたのしんだばかりか、手記まで発表して、外務省をクビになった」。

その後、メディアに登場し「軽薄な「色悪」的な役がら」を演ずるようになった彼は、「ごく最近テレヴィの深夜番組から特派されて、北欧の性解放の状況というものをルポしてまわっていたし、また、モスクワ経由でそこに脱出して住んでいる、アメリカの脱走兵と連絡をとってきた模様でもある」という。また、細木はある年の六月、「新左翼」のデモの監視庁への届け出責任者」となり、このデモを「樺サンノ十周忌」を記念するものとして実行した夜、樺美智子を崇拜する男に夜の酒場で殴られる。こうした挿話は小中が『私のなかのベトナム戦争』や『ラメール母』といった自伝的な書物において回想するところと重なる。

スコット・マッキントッシュを知ったのをきっかけに、細木は反捕鯨運動へとコミットしてゆく。細木の心を動かしたのは、スコットが録音した「ザトウクジラの歌（といっても、ある微妙な規則性を備えた叫び、あるいは唸り声のようなもの）」であった。「僕」は「この鯨の歌の翻訳みたいなもの」として書かれたというスコットの詩を想起しながら、イヤホーンを通してそれを聴く細木の姿を観察する。

ニンゲンよ、と歌うザトウクジラは告知する。きみたちは「ノルウェイ鯨新聞」一九六二年十月号にのった、マッコウクジラの興味深い習性、という記事を、まともに受けとめたか？ マッコウクジラの群のリーダーを捕鯨船が仕とめると、死んだ指導者のまわりに、生き残ったすべてのマッコウクジラが集って、それはヒナ菊の花のようなかたちである。ニンゲンよ、ヒナ菊の花片をいちまい、いちまいむしりとるように、鯨資源の大量消費をおこなうには便利だとしか、きみたちはこの鯨の不思議な習性を受取らないのではなからうか？ もっとも巨大な哺乳類の内部の秘密、マッコウクジラの魂のひそめているものを、なにひとつ理解しないままに、かれらを絶滅させていいのか、ニンゲンよ。そんなことをしてきみたちは、おそろしくも不安でもないのか、悲痛の情をうごかされずらしいのか、ニンゲンよ。ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ！

細木は鯨の歌を聞きながら「サングラスに隠れた眼から涙を流したたせ」「イヤホンを耳から抜きとると」「おれはこの鯨の歌っている言葉のいちいちの意味を解説したような気がするよ！」と感嘆の言葉を口にす。

こうして主人公を感化した鯨学者にも、実在のモデルが存在す

る。詩人にして生態学者のスコット・マクヴェイである（小中が実際に反捕鯨運動に関与したか、マクヴェイを知っていたかは定かでない、調査を要する）。一九六五年にアメリカを訪れた際、プリンストン大学で総長秘書を務めていたマクヴェイを知ったときのことを、三年後、大江は『核時代の想像力』（新潮選書、70・7）所収の講演のなかでこう語っている。「アメリカという国には個人的にまことに好意のもてる人間が多いとぼくは感じていますが、なかでもなかだか奇妙な人でよく強い魅力にあたえた人がいました。スコット・マクヴェイというふしぎな人です」。「突然に鯨の話のマクヴェイさんがしました。ぼくも鯨が好きです。そこでぼくらは見学はそこそこ鯨の話の三時間ほどして、別れました」（12）。なおマクヴェイも二〇一五年に刊行した自伝 *Surprise Encounters: With Artists and Scientists, Whale and Other Living Things* (Wild River Books, 2015) において、大江との交流に一節を割いている（13）。節の表題は、大江が訪米の際に行なった講演からとって「HUCK FINN, MOBY DICK, AND THE VIETNAM WAR」である。この講演は、マクヴェイによれば、アメリカのヴェトナムへの介入の深まりをアメリカ文化の性格に起因するものとして批判するという内容だったという。

最初の面会の後、大江は数篇の論文とともに、詩の小冊子をマクヴェイから受け取った。『The marguerite flower』というタイトルで、説明書きとして「ノールウェイ捕鯨新聞、一九六二年十月

号における抹香鯨の興味深い習性についての記事を読んで」と付されていた。それは大江によれば、「かれら仲間の鯨たちにむかって、数千年来の自分の祖先たちについて語ってくれたもつとも大きい鯨が死んでしまふ。そのまわりに仲間たちは花弁のように集まっている。そこで鯨を殺す人間は、ドンと一頭ずつ射ち殺してゆけばいい。雛菊の花片が一枚ずつみ取られてしまふように、鯨は一頭ずつ死んでゆく」という内容の詩であった(14)。「死滅する鯨の代理人」で参照されているのは、この詩である。

イヤホーンで聞いたザトウクジラの歌に感涙した細木大吉郎に、「僕」は「なんとなくウサンクサイもの」を嗅ぎつける。が、細木は「本気なのか反語なのか、こちらには不得要領」の態度をとりながら、「スコット・マッキントッシュの、鯨の絶滅をふせぐための運動を、テレヴィをはじめとする日本のマス・コミュニケーションにむけて橋渡し」してゆく。しかし二人の蜜月は長続きしない。細木は、マッキントッシュ夫妻の日本滞在の終りを記念して「勇魚屋^{イサナ}」という店に彼らを招待する(「樹木の代理人」にして「鯨の代理人」でもある「洪水はわが魂に及び」の主人公の名が想起される)。細木はそこで、スコットに気付かれぬよう刺身を食べさせ、あとになつてそれが鯨だったことを打ち明ける。スコットは嘔吐し発熱するが、細木は「いったいどうしてそのようなことになるのかかわからないという、「無邪気な」態度に終始」し、両者が企てていた日本でのキャンペーンはすべて白紙に帰してしまふ。さらに細木は

スコットの帰国後、イルカに扮装して捕鯨会社に乗り込み、マイクを通じて捕鯨中止を訴えるメッセージを発する。

テレヴィ・カメラがおさめた、事件の一部始終が検討されたところによると、最初にカメラが動きはじめた時すでに、イルカの頭部から覗いている細木のサングラスをかけた眼は、ガラス箱から浸み出たガソリンが、かれの横たわっている床をひたしつづけることを確かに認めている模様だという。しかし、それでも細木はデモンストレーションの中止を指示するか、単に起きあがるかするかわりに、いかにも焼身自殺するイルカのようになり合成樹脂の袋のなかでじつと懼れにちぢこまり、口からはブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、と鳴き叫ぶような、歌りような声を発していた。

こうして死滅する鯨と同化した細木は、鯨の歌を真似た叫び声をあげながら、マスコミが環視するなかで焼死する(主人公の死を賭した行動が「テレヴィ・カメラ」を通じて事後的に客体化されるという事態は「政治少年死す」にも通じるが、今は措く)。「軽薄」な作家に相応しくと言うべきか、細木大吉郎の行動はおよそ一貫性を欠いており、なぜスコットに鯨を食べさせたのか、鯨の代理人として死ななければならなかったのか、判然としない。本作にあっては、この真意不明のオポチュニストが、「新左翼」≡平連活動家を代表する

のだ。

作品の末尾には、細木の未亡人と「僕」との対話が配されている。細木の死後、スコットは細木の墓前に捧げるべく、鯨の写真にメルヴィルの言葉を手書きして付したものを「僕」に送ってよこしたという。「白鯨」第八十六章「尾 The tail」に読まれるその言葉は、「私にかれを解きあかすことができたとしても、ほんの皮膚の深さまでだ、私はかれをよく知らないし、これからも理解しつくすことはないだろう」というものである。「月の男」では原文「Dissect him how I may, I but go skin deep; I know him not, and never will.」が引用されている。スコットが送って来たこの言葉に、「僕」はあたかも鯨と同じように理解を絶した細木への「畏敬の念」を読み取り、「あれは焼身自殺して鯨の濫獲に抗議したのだと、誰もが認めざるをえなかったし、僕もそう考えています」と語る。対して細木の未亡人は、「生きているあいだ本気で信じてへんかった者が、死んだからというて、なんで本気で信じていた者になりますの？」と反駁する。彼女は一見すると英雄的な死を賭した細木の行動に冷や水を浴びせ、いかなる信念にも基づかない胡乱なもの、「ウサンクサイもの」としてそれを嘲弄する。こうして「僕」が不可解であるがゆえに崇高化しようとした細木大五郎の行動について、未亡人が滑稽で無意味なものにすぎないと申し立てるところで作品は閉じられるのである。

3 死滅する人間

一九七〇年夏、大江は来日したマクヴェイと再会している。マクヴェイが鯨の鳴き声を収めたカセットテープを持参したのは、このときのことである。マクヴェイは来日の際、八月二十九日から九月三日にかけて開催された、第一回国際SFシンポジウムに顔を出した（管見の限り、彼自身の発言の記録は見出されない）。

アーサー・C・クラークをはじめとする米ソ英加日五ヶ国のSF作家を招聘したこのシンポジウムでは、SFという表現形式に準拠しつつ未来社会をいかに積極的に構想するかという問いが中心に置かれた。同時期に開催されていた、「人類の進歩と調和」を標語とした大阪万博にも通底する問いである。石川喬司によれば、「SFと文明」をメインテーマに、「科学が約束する未来のユートピアを描くのがSFの役割」とする東側と「科学や政治などの暴走の懸念を先取りして〈悪しき未来〉を予防する効果を忘れてはならない」とする西側に対立があったという⁽¹⁵⁾。シンポジウムに際しては、小松左京がクラークと対談を行なっている。「未来社会への展望」(『SFマガジン』71・1↓巽孝之監修『国際SFシンポジウム全記録』彩流社、15・9)と題され、九月二四日にNHK教育テレビで放送されたこの対談では、次のようなやりとりがあった。

小松 これは、私の友だちのアメリカ人の学者の方——クラーク

クさんもお友だちですが、——その方がいつているには、イルカとかクジラという海中の大きな哺乳類というものは将来において、宇宙人のかわりに未来における人間のいい友だちになる可能性があるとことです。彼らはそれに匹敵するほどの大きな頭脳を持っているから、これから開発していけば、宇宙では人類以外の「知的な人」はなかなか見つからないかもしれないけれども、海中において、将来知的な友だちになつかるかもしれないということを言っておられました。クラークさんの『海底牧場』という本の中にも、それに似たようなアイデアが出てくると思います。それは昔からそういうことをお感じになつておられましたか。

クラーク 大体、人がイルカの知性などについて、興味を持ち始めますと——それについて『人間とイルカ』という、ドクター・リリーの本もありますけれども——ひじょうに、強い関心を持つわけです。特にイルカというのはかわいい動物です。(略)しかし、われわれが十分注意しないとあと一世代か、そのくらいでこうしたすばらしい哺乳類を滅ぼしてしまふおそれを持つております。イルカだけではないのです。現在でも捕鯨がひじょうにすたれてしまつて、クジラがいなくなつてしまつてゐるのです。

ここで小松は、鯨と人間が知的生物として共生する未来社会の

可能性を語り、『海底牧場』(高橋泰邦訳、60・12、早川書房)をはじめとする海洋SFを手がけていたクラークは、人間がこの知的生物を絶滅させてしまふ危機について言及している。人間が鯨を滅ぼしてはならないのは、それが人間に近い知性を備えた動物だからであるという論理は、反捕鯨の言説においてしばしば繰り返されるクリシェである。小松左京の右の発言は、小松とクラークの双方を知る「アメリカ人の学者」すなわちスコット・マクヴェイが、このSFシンポジウムの中で一定の存在感を持っていたことを示唆しているよう。なお、マクヴェイとクラークは八月に来日する直前、ハワイで開催された未来学会に参加し、鯨について議論を交わしていたという(16)。

同年一〇月、マクヴェイの呼びかけに応じるかたちで、生態学者の今西錦司、元東大総長の茅誠司、解剖学者の小川鼎三らが「鯨を守る会」を発足させている。この会は方針のひとつとして、「キャンペーン」の資金になるクジラの声のステレオレコードと解説書(17)が、日本で手軽に手にはいるようにする」ことを掲げた(17)。その音源はマクヴェイの録音によるものであったと見てよい(解説書もマクヴェイの著作であったと考えられる)。マクヴェイによれば、仮にこの会が実際に反捕鯨運動を起こさなかった場合は、大江が自身の主導で五千人規模の集会を開催することを提案したという(18)。小中陽太郎よりもむしろ大江健三郎自身が反捕鯨運動にコミットしようとしていたことを物語る証言である。

大江の想像力は、鯨を人間以上に人間的な存在と捉え、鯨の死滅に人間滅亡のヴィジョンを重ね合わせるという終末論的な性格を備えていた。七〇年の暮れに著した一文「私の70年」(「アサヒグラフ」70・12・25)において(19)、大江は「近い未来におこるべき、この人間世界の終末の、あきらかな徴候が、つきつぎに浮びあがっては、しだいに黙示録的な炎のきらめきをとまなひはじめるように幻覚される」とこの年を振り返り、具体的には大阪万博、マクウェーとの再会(この再会の際には、クラークの「海底牧場」についても話し合ったという)、三島由紀夫の死といった出来事について語っている。

大阪万博の開催に際してイニシアティブを握ったのは、「日本未来学会」の面々である。万博と国際SFシンポとを連動させた小松左京、今西錦司らいわゆる「新京都学派」の知識人たち、メタボリズム・グループおよび丹下健三周辺の建築家たちが中心になって六八年に発足した、領域横断的かつ産学協同的な学会である(20)。大江は、未来学者らが「千里原の広大な竹藪を伐りひらいた空地に、かれらの終末観のイメージを、展開する」という期待に反し、むしろ「時の権力(政界・財界をとわず万国博のスポンサーは、まったく端的に、現在の権力の代理人であった)が選ぶ『未来』のみを、現実的な『未来』とみなして、反体制的な『未来』観は、空想的、非科学的とする」と批判する。万博が、アポロ宇宙船が持ち帰った月の石を展示する「アメリカ館」に代表されるバビリオンを通じ

てバラ色の未来のイメージを演出したのに対し、大江は、死滅する鯨に象徴される終末論的な未来のイメージに固執した。

そのイメージを喚起したのが、ほかでもなくマクウェーが携えた鯨の声のカセットテープだった。大江は書いている、「かれはさながら巡礼のように、死滅しようとする鯨を救助する運動をおこすべく、日本にやってきたのである。小さな鯨の絵をプリントしたネクタイをつけ、鯨の『歌』を録音したテープをたずさえて。ぼくらは鯨の『歌』のテープを聞き、それが鯨の世界の黙示録のようであると語りあった。そこにはじつに美しいが悲惨でもある、強く多様な叫び声と、海洋の底の波音が世界の終りを逃げまどう者らのように記録されているのであった」と。マクウェーが聞かせたその叫び声から大江が探り当てたのは、「年々、激減してゆく鯨の未来に、そのすばらしい動物の全面的な死滅を見、しかも鯨の死滅に人類の死滅をかさねて見ているような、かれのヴィジョンこそを十全に感知しうる想像力」であった。かつて監禁された犬たちに「日本人」としてそうしたように、一九七〇年の大江は、死滅する鯨に「人類」として自己同化するのである。

一九七〇年の大江健三郎に終末論的ヴィジョンをもたらしたもうひとつの出来事が、三島由紀夫の死である。大江はこの出来事の一報に、三島が「暁の寺」の舞台としたベナレスの地で接している。「作家とは、この人間の世界が滅亡しかかっていると感じているか、そうでないまでも、諸行無常と観じていながら、しかも、

救いを見出していないところの人間なのです。その作家が、自己破壊の衝動にかられるとして、それはかれ自身にとってしばしば、抑制しがたいでしよう。こう語る大江は、滅亡のヴィジョンと自己破壊への傾斜を確かに三島と共有している。しかし三島が「追いつめられた作家」として「自己破壊にあたつてのむじめな響きを、おおいにかくすべく、勇ましく猛った叫び声を発した」のに対し、大江はその「TENNO HEIKA BANZAI」という「自己中心的な粗暴な叫喚」よりも「滅びようとしている鯨の、言葉としては奇妙なことながら、あの人間的な歌」に就こうとする。死の間際の細木大吉郎そのままに、大江もまた「もつと直截に鯨の叫び声をひとり模倣している自分を見出すこともあった。ウエッ、ウエッ！ ウエエエイ、ウエエエイ！ と軀をのけぞり喉をふりしめるようにして」。こうして三島の死を知った大江はベナレスの地で、「ウエッ、ウエッ、ウエエエイと、鯨の歌を模倣してみても、なにものかもつとも人間的な根本のものが自分のうちに芽ばえる勢いをはげました」というのである。

すでに明らかなように、直接的には平連の「軽薄」な作家小中陽太郎をモデルとした「死滅する鯨の代理人」の主人公細木大吉郎には、大江自身が対立的に把握していた二人の作家の像が重層的に投射されている。本気とも冗談ともつかない演説を行ない、マスコミの前で華々しくも不可解な死を遂げた細木の姿は、三島由紀夫を想起させずにはいない。しかし細木が放つのは「TENNO

HEIKA BANZAI」という叫喚ではなく、「ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブオッ、ブイン、ブイン、ブイン、ブオッ、ブオッ」という叫び声であった。イルカに扮してカセットテープの鯨の歌を真似た、奇妙にして滑稽な細木の叫び声には、そこに「人間的な根本のもの」を聞き取る大江自身の叫び声がかたまっているのである。

4 逆襲する動物

一九七〇年夏、スコット・マクヴェイが携えたカセットテープの鯨の叫び声を、あるSF作家は、大江健三郎とはおよそ異なる仕方であけ止めていた。平井和正である。国際SFシンポジウムの発起人のひとりであり、開催に際して事務局を務めた平井は、翌年のはじめに発表した一文「人類公害」において、「われわれがクジラおじさんと呼んだ海洋生物学者マクベイ氏が、ひよっこリホテル・ニュージャパンの事務局を訪れたときのこと」を書いていく。

なにしろ忙しいのと、こっちがさっぱり英語を喋れないのとで、話はチンプンカンプンだったのだが、クジラおじさんがたいへん熱情的に、愛すべきクジラやイルカなど未来のお友だちの虐殺を即中止すべきだと語っていることだけ理解できた。

クジラおじさんが持参したステレオ・テープには、海中で録音したザトウクジラ三頭の合唱が収録されており、その神秘の

魅力にはたいそう感激した。なにしろ人類の見さかいのつかない暴虐ぶりにはげんなりしているので、クジラおじさんのキャンペーンに賛意を惜しまなかった。

それ以来、人類公害説が僕にとり憑いてしまったのである。ホモ・サピエンスこそ地球上に生じた最大の公害というわけだ。発生以来というものの人類がどんなに悪事ばかり働いてきたか、これはもういくらでも論証できる。人類とその忠良なる共犯者の犬は、全地球生物に呪殺されて当然である。

大江が人間以上に人間的なものを鯨に見出し、死滅を強いられる被害者たる鯨に自己同化するのに対し、平井は鯨に死滅を強いる加害者たる人間に憤激するところに創作上の動機を置いた。マクヴェイから聞かされた鯨の「合唱」が平井にもたらしたのは、「人類の見さかいのつかない暴虐ぶり」への怒りであり、「地球上に生じた最大の公害」である人間こそ滅亡すべきであるという認識であった。続けて「全人類三十六億、腹を切ってお詫びすべきだとクジラおじさんにおうと思つた」と述べる平井は、三島由紀夫の死をその先蹤と捉えている。「三島氏はかつて、SFこそ近代ヒューマニズムを克服せよと叫び、われわれSF作家を啓発してくれた人である。真の天才三島氏がついでに文学を否定して死んでしまったので、文学者は大ショックを受けているが、もちろん近代ヒューマニズムを克服したSF作家の僕は平気である。

自己の立場を再認識したにすぎない」と平井は述べた(21)。

死滅する動物として、平井が鯨にもまして注目したのは、狼である。善良なる鯨とは異なつて、狼には「悪」のイメージがつきまとう。本来は社会性、愛や友情を備えた狼が、「赤頭巾」の童話のように「奸佞邪悪、酷薄残忍貪欲な凶獣」と見られるようになったのは、平井によれば、人間が「自己の邪悪な氣質を直視することを好まず、それを他に転嫁した」結果である。こう述べる平井は、「人類は自らにむけるべき憎悪と侮辱を気の毒な狼に向けた」のであり、「極悪非道な悪役の狼像は、実は人類の自画像だった」と論じた。

平井和正の「ウルフガイ」シリーズは、普段は人間の姿をした狼少年を主人公とするアクションSFである。その第一作『狼の紋章』は、「死滅する鯨の代理人」の発表とほぼ同時期、一九七一年一月にハヤカワ文庫SFの一冊として刊行された。「悪徳学園」と呼ばれる東京の私立中学に、不良少年・犬神明が転校してくる。犬神は暴力団東明会の組長の息子・羽黒獺を中心とする非行少年たちと抗争を起こすが、担任の青鹿晶子は犬神の「一種独特の野性味を帯びた精気」に心惹かれ、その正体を目撃する。

あの夜の月は、あざやかな円盤状の姿を夜空に見せていた……異様な戦慄が生じた。胸の芯に、氷塊を呑みこんだようだった。その一点から、気味悪いふるえがにじみだし、全身に拡が

っていく。

それは、ありえぬ非現実だ。無知な中世の人々の迷信だ。

アポロ宇宙船が、月という天体の神秘性をことごとくはぎとつたいま、この科学技術万能時代に、そんな迷妄のとばりに包まれた過去の亡霊、不死身の獣人が実在するなんて、疑うだけでも許されぬことだ。

青鹿は、激しく頭をふり、妄念を追いはらおうと努めた。窓を開放して、冷たい夜気を呼吸し、たかぶった気持をしずめようとした。

非道な人間たちがナイフで刺し、拳銃で撃つても不死身を誇る犬神明は、満月の夜になると正体を現す狼だった。人類の月面着陸という、それ自体科学小説的な現象が現実化するなかで、ゴシックロマンス風の「ウルフガイ」の世界にあっては反現代的な「迷信」こそが現実化される。作品が直情的に打ち出していくのは、人間の邪悪な暴力への憤怒であり、その理不尽な攻撃に逆襲する狼への畏敬である。

大森望は「犬神明が歌舞伎町で不良にからまれる冒頭から一気に読み終えたが、SFファンになりかけの小学生にとって、それに匹敵するくらい強い印象を残したのが、長い長い著者あとがきだった」と述べるが(22)、『狼の紋章』^{オシロウ}の末尾には、七つのパートからなる長大な後記が付されている。先に見た評論「人類公害」

は、この後記のうち「その3」に置かれている。冒頭「その1」に配されているのは、「出さなかった手紙」と題する一文である。実際には六八年一月、平井の言葉で言えば「俗流バラ色未来学の全盛期」に書かれたというその手紙は、ほかでもなく大江健三郎を宛先としている。

大江への手紙は、「あなたが、現代の神話ともいふべきヒューマニズム幻想にがんじがらめになっているのではないかという疑惑」に発している。大江は「全人類的な規模での連帯」を語るが、平井に言わせれば「人類は、愛しあうことよりも、憎みあい殺戮しあい破壊しあう作業のほうに、じっさい性に合っている」。このように手紙を綴る平井は、大江に向かって呼びかける。

あなたが熱情をこめて、〈連帯〉を語るほどに、どうしようもなく野蛮で凶悪な人間どもの咬みあいを意識せずにはいられないのであります。世界の人類・宗教観の相剋、マイノリティ問題に目の焦点を合わせるほどに、人間同士の完全な相互理解の困難さを痛感せずにはいられません。

人類はもう駄目だといってしまえば、これはミもフタもないけれど、この不完全きわまる種であるところの人類が、いかにして自らを超えていけるのかとなると、もはや神仏の救いを待つほかはないように思えます。

平井が「ウルフガイ」シリーズにおいて怒りを込めて描出したのは、狼に理不尽な暴力を行使し彼らを死滅に追いやる人間の野蠻と凶悪であり、その野蠻と凶悪を狼に転嫁する人間の欺瞞である。平井のこうした反ヒューマニズムの視角からすれば、人間への希望を前提とする大江のヒューマニズムは、いかにも微温的な自己欺瞞的なものとして捉えられよう。「人類間の断絶を、幻想で埋めようとする〈持続する志〉がわたしを烈しく苛立たせている」と平井は言う。大江が鯨への共感を語り、あたかも死滅を強いられた無垢な被害者としての位置にみずから置くとき、人間であるおのれ自身こそが野蠻な加害者であることは見失われる。

一九七二年一〇月、大江は単行本『みずから我が涙をぬぐいたまう日』を刊行した際、短篇であった「死滅する鯨の代理人」を増補し、「月の男」という新たな中篇小説へと改作した。作中には「僕」と細木大吉郎、スコット・マッキントッシュの他に、新たな人物「ムーン・マン」が主人公として召喚される。月面に着陸する宇宙船基地から東京へ逃走したこの人物は、「あの人」すなわち天皇に強い関心を寄せ、細木の死後には「もしあの人^{ムーン・マン}がサイキの死を悼むことにしたら、それはあの人のために本当に価値のある転換になったのに」と語る。こうして「月の男」は、三島由紀夫の死の衝撃を引き受けながら、大江が「セヴンティーン」以来追究してきた「純粹天皇」のモチーフを「みずから我が涙をぬぐいたまう日」と並び改めて追究する作品となった。私の考えて

は、この改作は、平井和正の批判に対する大江健三郎からの応答であった。月の夜に人間離れた崇高なる獣と化す平井のウルフガイに、大江は月面への着陸に人間として慄く惨めなムーン・マンを対置するのである。

註

(1) 小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争―ベ平連に賭けた青春と群像(サンケイ新聞社出版局、73・10、一九頁・一五四頁。なお、大江は『週刊アンボ』創刊号(69・11・17)に、「Going to meet the Man」と題する小説風の短文を寄せている。

(2) 本多勝一(編)『文筆生活の方法』(晩聲社、86・12、五頁)

(3) 小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争―ベ平連に賭けた青春と群像』前掲、一八頁

(4) 桂秀実『1968年』(ちくま新書、06・10)、一三五―一六頁

(5) 小中陽太郎『小説ふあつく』(現代評論社、72・4)、一〇一頁

(6) 小中陽太郎『小説ふあつく』前掲、九五頁

(7) 山本昭宏『大江健三郎とその時代』(人文書院、19・2)、一七三

―一九頁

(8) 大江健三郎『二つの中篇を結ぶ作家のノート』(『みずから我が涙をぬぐいたまう日』講談社、72・10)

(9) 川西政明『大江健三郎論―未成の夢』(講談社、79・10)

(10) 小中陽太郎『私のなかのベトナム戦争―ベ平連に賭けた青春と群像』前掲、二二三頁

- (11) 小中陽太郎『ラメール母』前掲、二九三頁
- (12) 大江健三郎『アメリカ論』(講演)(於紀伊國屋ホール、68・4・30)「核時代の想像力」前掲
- (13) ただしマクヴェイはここで、大江との初対面を一九六六年のことと記述している (Scott McVay, ibid., p.149)。
- (14) 大江健三郎『アメリカ論』前掲
- (15) 石川喬司「あの頃のこと」(早川書房編集部編『日本SF・幼年期の終り』『世界SF全集』月報より) 早川書房、07・8)
- (16) Scott McVay, ibid., pp.155-6
- (17) 「鯨を守る会」発足 茅氏を中心に保護運動」(『朝日新聞』70・10・28、二三年)。「朝日新聞」はこの会の発足について、「米プリンストン大学のスコット・マクベイ氏のキャンベーンにこたえたもの」と報じている。服部訓和「言葉」のかたち、「鯨」のかたち——大江健三郎「月の男」(『稿本近代文学』08・12)もこの記事に注目し、大江とマクヴェイを検証している。この論文は「月の男」を本格的に論じたものとして貴重だが、執筆時期の問題もあり、マクヴェイ自身の証言を参照していない。
- (18) Scott McVay, ibid., pp.150-1
- (19) このテキストは「鯨の死滅する日」と改題され、評論集『鯨の死滅する日』(文藝春秋、72・2)の表題作となっている。なおマクヴェイの自伝 (ibid., pp.151-3) には、大江が著した詩『The Day When Whales will be Extinct』が掲出されている。
- (20) 日本未来学会が結成された経緯と同学会が大阪万博で担った役割については、徐翌「小松左京と日本未来学——SFと並走する「未来」」(『海港都市研究』17・3)に詳しい。
- (21) 三島は柴野拓美らのSF同人誌『宇宙塵』(63・9)にエッセイ

「終末観と文学——水爆戦争の時代に生きて」を寄せ、「私は心中、近代ヒューマニズムを完全に克服する最初の文学はSFではないか、とさへ思っているのである」と書いている。

(22) 大森望「現代SF銀光局」(河出書房新社、06・9)、三四四頁。中島梓もこの一文に注目し、平井と大江の「資質」の近さを指摘した上で、大江作品が所定のテーマのためにストーリーを組み立てるという「帰納的なダイナミズムのシステム」を備えているのに対し、平井の場合、「テーマに奉仕するストーリー、ストーリーによってメッセージされるテーマ」を持たず、ただ「ダイナミズム」だけが作品を駆動していると論じている(ダイナミズムの系譜——平井和正の展開と転回)、『別冊新評 平井和正・豊田有恒集』新評社、78・10)。

(続く)